

令和 7 年度 専門学校デジタルアーツ東京
学校関係者評価報告

令和 7 年 8 月 2 9 日

令和 6 年度学校自己評価（基準日：令和 7 年 3 月 31 日）をもとに評価実施

 専修大学 菅原学園

専門学校 デジタルアーツ東京

学校関係者評価委員会報告

学校法人菅原学園 専門学校デジタルアーツ東京では、本校の学校関係者評価委員会規定に基づき委員会を実施いたしました。以下に議事進行についてその内容をご報告いたします。

今後は、各委員からの貴重な意見や提案を真摯に受け止め、学校運営の改善および教育の質の向上に努力いたします。

会議名：学校関係者評価委員会

日 時：令和7年7月24日（水） 16：30～17：30

会 場：専門学校デジタルアーツ東京

出席者：学校評価委員、事務局

1. 学校関係者評価委員及び事務局について

（1）学校関係者評価委員

業界関係者：関根史暁 （株式会社サンステラ 3D事業部 部長）

業界関係者：池田聖児 （株式会社サンシャインコーポレーション 取締役）

業界関係者：東海林龍 （株式会社レオパード スティール 代表取締役）

業界関係者：藤沢理子 （株式会社エッジワークス 取締役）

業界関係者：山本健太郎 （株式会社ループエンド 代表取締役）

業界関係者：江口博昭 （株式会社デジタルワークスエンタテインメント 総務部長）

業界関係者：鍵谷亮 （株式会社コミックルーム 執行役員）

卒業生：金澤美菜子 （CGアーティスト）

地域住民：平山智邦 （地元企業：有限会社ツチキン 取締役）

（2）事務局

学校教職員：都築敏明 専門学校デジタルアーツ東京 副校長

学校教職員：五十嵐ゆかり 専門学校デジタルアーツ東京 教頭 兼 企画広報部 部長

学校教職員：平井俊之 専門学校デジタルアーツ東京 教務部 部長

学校教職員：青田美穂 専門学校デジタルアーツ東京 教務部学生課 課長

学校教職員：有我正則 専門学校デジタルアーツ東京 事務管理室 事務長

2. 委員会次第

- ・代表挨拶および学校概要紹介
- ・委員および事務局自己紹介
- ・令和6年度自己点検・自己評価紹介
- ・討議、意見交換
- ・閉会の挨拶

3. 討議、意見交換

(1) 教育理念・目標

事務局側から学校教育における専門学校の在り方の変化について私立学校法、学校教育法の改正内容を説明し、学校としての取り組みを報告した。特に本学園としても社会の信頼を得てさらに発展していくための実効性のあるガバナンス改革を既に推進し、理事会と評議員会の権限分配を図って透明性のある学校運営をできるよう取り組んでいる。また人口減少が進む中、職業教育の重要性が高まっており、専修学校において教育の充実を求められるようになってきた。学校教育法が改正されることで大学と同等の扱いを受けることになり、入学資格や単位制への変更、第三者評価の実施等の準備を早急に進める必要が出てきた。求められるハードルは高いが、適切な運営管理により、学校の評価を上げていくことは可能であると考えられる。さらなる教育の質の保証をすることで魅力ある学校作りを継続していきたいと報告した。

委員側からは、少子化や留学生の対応など、専門学校の抱える課題は大きいが、職業教育における専門学校に社会が求めるニーズはますます増えていくことだろうとの意見があった。また、学校制度が改正されることをチャンスと捉え教育の質の向上に励んでほしいとの要望を受ける。

(2) 学校運営

委員側からここ何年も本校の卒業生を採用しているが、どの卒業生も愛校心にあふれ、何かあった時に学校を頼っているように感じる。学校が心地良く、信頼関係も構築されている場所であることが伺える。在学時に成長していく過程で、手本となる大人たちとの人間関係ができているのではないか。これは学校としての強みであり、これまで培ってきた学校運営の財産として活かしながら、学校づくりをしていってほしいとの意見があった。

事務局側から職業訓練校として各業界に通用する技術を習得するとともに、今後も社会人としての心構えを育んでいきたい。また、小中高の時期に学校に馴染めなかった学生たちにも、学校が楽しい場となる取り組みも行いドロップアウトせず成長できる環境を整えていきたいと説明した。

(3) 教育活動

事務局側から外部講師や業界人、関連企業による授業の実施、コンペティションや共同制作プロジェクトの参加というような業界との連携実績を持つようにしている。また本校の特徴である他学科とのコラボレーションについても活発に行い、作品制作のノウハウを実作業の中で習得するとともに学生間のコミュニケーションを育む場となっている。今後も教育の質の保証・向上に向けた取り組みを推進し、高い専門性と人間力を兼ね備えた職業人の育成に取り組んでいきたいと説明した。

委員側からは、コミュニケーション能力について様々な企業で必要とされ、自分の考えをしっかりと相手に伝える能力、言語化出来ることがすごく大切だと強く感じている。表現活動においても、自分の作品に込めた思い入れや世界観を、正確に相手に伝える力ということが不可欠となるので、その為には、学校で単に課題制作に対する技術や知識を学ばせるだけでなく、キャラクターを作る際の名前や性格、世界観やコンセプトを正確に部分設定すること、さらには制作意図を他者にプレゼンテーションする機会を必ず設け、それに対し、そのお互いの作品を講評し合うことを勧められ

た。

事務局側からは、ぜひ授業の中に取り入れ、学生が自己表現と他者理解の両面から養っていけるよう検討していきたいと回答した。

(4) 学修成果

事務局側から急速な発展に伴う AI による画像生成技術については、学生の制作活動にも影響を与えている。利便性を認めつつも人間にしかできない表現とは何かということを常に考え、ツールとして活用しながら、学生自身の想像力や独創性を育むことに力を入れなければいけない。それが一番苦労しているところであり、これからの課題になると考えていると報告した。

委員側から AI については各業界で重要なものになっていくと考えられる。AI にさせたい作業は各業界又は各社によって異なるはずで、今後は各社に合った生成 AI の育成がなされていくのではないかという意見や、実際に活用し始めており非常に有効であるが、創作物の作成には一切使わない、どのように共存していくかが課題であるとの意見も出た。ただし、業界の求めるスキルとしては今までと変わらず基本的なことを身につけられているか、創作力、表現力等も含め今後も求められるものになる。またアナログ作品を確認することでフィルターの役目も果たすので、デッサンやクロッキー等についてもポートフォリオに入れた方が良いとの助言があった。

(5) 学生支援

事務局側から、今年度より多子世帯（3人以上の子供）の家庭や理工農系の学校が修学支援新制度の対象となった。拡大、拡充されことで、保護者や学生にも、制度内容が浸透してきている。前年度と比べても、制度利用者の人数が増えている。特に多子世帯での制度利用が多く、経済的な理由で進学を諦めることのないよう制度を分かりやすく告知し利用を促すような学校独自のサポート体制を整えていきたいと説明をした。

委員会側の卒業生から、当時より経済的支援の類は多くあり、学校側からも制度の説明があった。ただ、制度によって内容が異なり、情報量も多く、複雑であったと記憶している。そのあたりを分かりやすくした上で、積極的にガイダンス開催の案内をしてもらえれば、学生が制度を知る良い機会となるのではないかと意見があった。

事務局側からは、新入生だけでなく在籍済みの学生に対しても、奨学金希望者が増加している状況を踏まえ、奨学金関係の説明会を複数回実施するとともに、奨学金担当の教員を配置しきめ細やかに個別対応を行っていると報告した。

(6) 教育環境

事務局側からアーツ館、デジタル館とも、竣工から 30 年以上が経過し、建物自体が古くなっており施設の改修が懸案事項となっていると報告。その対応として今年度は内装を中心に、エレベーター、教室扉、床面の修繕を計画し、施工時期は、授業に支障のない夏休みや春休みの期間としていることを説明した。また防災に対する体制についても南海トラフ地震がいつ発生してもおかしくないとの報道もあり、早急に、防災計画を見直さなければいけないと認識している。避難方法だけでなく学内の備蓄等も含め十分学生の安心安全を確保できるよう進めていきたいと説明した。

委員側からは、防災計画として学生たちをどのように守っていくのか、しっかりと整備していただきたい。また、大災害での対応は勿論であるが、熱中症対策など、身近に起こる有事対策も整備して欲しいとの要望があった。

(7) 学生の受け入れ募集

事務局より 2023 年度に 18 歳の人口が 110 万人を下回った。 昨年は、さらに 3 万 4 千人の減少と言われている。そんな中、大学進学率は年々上昇傾向にあり、2024 年度には過去最高の 59.1% となった。専門学校への進学率は、20%強程度で、非常に厳しい状況が続いている。本校も同様であり、ここ数年、学生募集には苦慮しているのが現状と報告。ただし高校生の専門学校進学が減少している中、年々アジア各国から専門学校への進学者数は増加している傾向があり、将来を見据え、積極的に留学生の受け入れを図っていきたいと考えている。これまでは留学生対象の学科への募集に力を入れていたが、日本人を対象としている学科にも、積極的に留学生を受け入れていく。なお、留学生の有益な募集方法については、今後の課題と説明した。

委員側から、他校ではオープンキャンパスの申し込み時から、丁寧な対応をするところもあると聞いている。たとえば受付後の返信メール文章のひとつにしても、来校を歓迎する雰囲気が伝わってくることで、これは凄く大切だ。ぜひ本校でも取り入れてはどうだろうか。専門学校を検討している高校生は、進学に関し不安を抱いているので、安心感を与える対応は必要であると思うとの意見があった。

事務局からオープンキャンパスへの申し込みを受け付けた際には、本校も返信をするようにしている。また、リピートして申し込みをしていただいた方や高校内のガイダンス等で対応済みの方については更に一言添えるよう工夫していると取り組みを説明した。

また委員側から 1 年生の前期は全学部授業を自由に取れる学校もあり、入学後のミスマッチを防ぐためにも有効ではないかとの意見があった。

事務局側からは、色々な学科で授業を学べるというのは理想であるが、現状のカリキュラムでは対応できない部分もあり、将来的な課題として検討していきたい。現在は、オープンキャンパスで様々な学科の授業を受講することで入学前にミスマッチを無くすよう参加者には促していると報告した。

(8) 財務

ホームページ上で公開しており、適切であると判断された。

(9) 法令等の遵守

適切であると判断された。

4. 配布資料

- ・ 入学案内書
- ・ 自己評価表